

作文宮城 60 号 特別編

あの日の子どもたち

2011・3・11 東日本大震災記録集

宮城県連合小学校教育研究会国語研究部会

あの日の子どもたち

気仙沼・本吉



かせつに入つてよかつた

気仙沼・階上 一年 すずき あいる

「つなみがきたからにげて。」

近くの人がいったので、ぼくたちもすぐくつをはいてうらのさかをのぼりました。うしろをみたら、ビューンビューンとつなみがきて、がれきやいえがよこになつたりさかさまになつたりしていました。

「一ばんちかいのは、じちかいかんだね。」

と、おばあちゃんがいったので、ぼくは、さいしょ、もりまえばやしのじちかいかんにひなんをしました。いつばい人がいました。ぼくのおばあちゃんたちがごはんをつくってくれました。つぎに、はしかみ中学校にひなんして、さいごに、はしかみ小学校のずこうしつにいきました。ずこうしつの中に入ったら、こくばんが広くてびっくりしました。さいしょのときは、人が十二人いました。入学するときも、ぼくは、はしかみ小学校にいました。

ごはんは、じえいたいさんがつくってくれました。

「ごはんですよ。みなさんあつまってくださいあい。」
と、おとうばんの人がいうと、

「はあい。わかりました。」

と、みんなならびました。早くたべたいなあとおもつたけど、ずこうしつのまえをとおつてパソコンしつの近くまでならんできました。

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

たまには、まだかえっていない人のぶんをぼくがはこびました。やさやかなやサラダやごはん、デザートもできました。おいしかったけど、ぼくは、ときどきおかあさんがつくったおりょうりがたべたくまりました。

「おかあさん、めだまやきたべたいな。」

といったら、

「かせつに入つたらつくつてあげつから。」

といわれました。

はしかみ中学校のときはおふろに入れませんでしたが、はしかみ小学校では、ゴルフじょうのおふろに入りました。ぼくは、おとうさんがおしごとについていたので、おかあさんといっしょに入りました。

「やったあ。おふろだ。」

「だだだだだだジャポン。」

「あっちい。」

「あぶないからしずかに入りなさい。」

「はあい。わかりましたよ。」

ぼくは、あつくてもがまんしておふろの中にジャポンつて入つて、ぶくぶくもぐりました。なんかいももぐつてあそびました。

「つぎだよ。からだあらつて。」

ひまわりのひみつ

気仙沼・鹿折 三年 館山 慶

三月十一日、東日本大しんさいで、気仙沼は大きなひがいをうけました。とくに鹿折は、火さいが発生し、また、小学校も津波でしん水したため、今も一階の教室は使えません。しんさいのショックや、仲良しだった友だちが次々と転校してしまい、わたしは、かなしくて、ふ安な気持ちでいっぱいでした。

わたしの気持ちをふ安にさせたもう一つの理由は、いつも家でわたしたちの帰りをまつていてくれたお母さんが、四月から仕事のため、昼間、家にいなくなってしまうことでした。(また大きな地しんがきたら、お母さん、すぐにむかえに来てくれるかな。お母さんと会えなかつたら……。)

と考えるだけで、どうしよう、どうしよう、という気持ちがずんずんと大きくなつて、なきたくなつてきます。そんなとき、お母さんは、

「すぐにむかえに行けないかもしれないけれど、お母さんはかならずむかえに行くから、それまでは、先生の言うことをよく聞いて、おりこうにまつているんだよ。」

一学期がはじまつて一か月がすぎたある日、
「ただいまあ。」

と、いつものようにお母さんが帰つて来ました。

「おかえり。」

と言つて、だきつこうとすると、白いふくろをこれなんだ、と言つように高く上げてもっていました。

「何。」

と聞くと、お母さんは、ふくろの中が見えるようにひろげて、「ひまわりのなえ。いただいたの。庭にうえようね。」

と言いました。ふくろをのぞいて見ると、小さなひまわりのなえが、三本入っていました。

お姉ちゃんも帰つて来て、わたしたちは、三人でひまわりをうえました。

早くひまわりが大きくなるようにと、毎日水をあげたり、話しかけたりしました。さみしいときやふ安なときは、ひまわりを見ながら、

(大じょうぶだよ。)

と、心の中でつぶやきます。そうすると、何だかお母さんが近くにいるような気がして、ふしぎと気持ちがおちつくのです。

小さかったひまわりは、いつの間にか、わたしの背より高くなり、今では三メートルほどになりました。

さて、わたしは、ひまわりを見ているうちに、あることに気づきました。朝、東を向いていたひまわりが、夕方になると、西を向いているのです。

(あれ。ひまわりつて、お日さまとおいかけっこするように動くんだ。)

と思い、花がさくのを、うきうきしながらまつていました。緑色だったつぼみが、だんだん黄色になつてきたある日の朝

みなさんへの感謝の気持ち

気仙沼・小泉 六年 三 浦 麻 文

三月十一日、二時四十六分。

ゴゴゴゴゴという大きな地鳴りと地震で、校舎が右に左に大きくゆれ始めた。私たちは体育の授業が始まって、友達がボールをけろうとしたときだった。職員室からは校長先生の、「校庭の真ん中に走れ。」

という大声が聞こえ、私たちは夢中で真ん中に向かって走った。だんだんに立っていられなくなり、そのうちに他の学年の人たちが校舎の中から逃げるように走ってひなんしてきた。ほとんどの人が家や家族のことを心配して泣きじゃくり、その様子を見ていた先生は、

「家族を心配する気持ちは分かるけれど、まずは自分の安全を考えて落ち着いて。ここは安全な場所だから。」

と、少し強く言った。高台にある小学校には次々と地域の人や家族がひなんしてきた。

泣き声などがして少しざわつく中、ラジオを持っていた校長先生が、

「大津波警報。津波が来るかもしれない。」
と言ったので、

（本当に大津波が来るのだろうか。）
と、不安になったが、来ないでほしいと祈った。

雪が降ってきたので、先生やうちの人の車の中に入ろうとしたときだった。だれかのお母さんが町の様子を見に行き、

「大変だ、町がなくなった。」

と、大きな声でさげんでいたのので、一体何が起こったのか分からなくなり、おそろおそろ町の様子を見てみると、町はずでに大津波にのまれていた。

津波はあつという間に私たちの小学校の下まで来てしまい、学校の下の住宅に住んでいた友達も走って逃げながら泣いていた。自分の家が流されるのを見るといことはどんなにつらく大変なことなのだろうか、頭の中が真っ白になり、言葉をかけることができなかつた。先生に、妹と一緒に行動するように言われ、私は妹を連れてみんなとさらに高い山の方へひなんした。山にひなんしても、町の様子を見て大津波がどんなにおそろしいものかということを知り、これまで体験したことのないきようふ感で体のふるえが止まらなかつた。家族や自分の家のことを考えるとパニックになりそうだったが、妹も他の友達もいたので、

「ここは安全な場所だ。」

と、何度も自分に言い聞かせた。雪がふってきてだんだん寒くなり、

（津波の後は雪か。）

くやしいけれど、白い雪が天使のように見えてきた。雪が止みそうになかつたので、みんなでブルーシートを広げてその下に入るようになった。雪の重みで下がってくるブルーシートを持ち上げながら、家族は生きているのか、いつもの温かい笑顔を見ることはできないのかと不安でいっぱいになつ

願いをこめて

気仙沼・大島 六年 畠山呼人

ヒュー……ドーン
ドン……ドドーン
バチバチ……パラパラ

今年も浦の浜に花火があがった

今年の花火は特別な花火

あの日から

楽しかったいろいろなことが

取りやめになつてきた

ぼく自身も思つていた

まさか、こんなときに花火はないよな

でも、そんなとき

秋田の花火師さんがやつてきてくれた

だから

今年の花火は特別なのだ

赤や青、黄色や緑

ナスのような色のももあつた

ニコちゃんマークの花火に水上花火

色も形もさまざま

なんか、今年の花火きれいだったな
強くそう思つた

いつもより大きくも見えた

何だかやる気が出てきた

何だか勇気が出てきた

何だか心が温かくなつた

元気が出てきた

そうだ、

今年の花火は

大島の人たちが元気になるように

大島の人たちが前に進めるように

夢や希望、元気や勇気をもつようと

願いをこめて

大きな夜空にあがつたのだ

そして、

何年後かの大島を

緑の真珠にもどそうと

そんな明るい希望をいだいた

大島の人たちの笑顔も一緒に

大きな夜空に浮かびあがつたのだ

(指導 佐藤 愛子)